SEMINAR

JNTO発

外客攻略のヒント

北村徹　JNTOローマ事務所長

vol.114

ビフォーコロナに戻るイタリア

コロナ禍からの早期回復を目指し、厳しいロックダウン（都市封鎖）などの対策を講じてきたイタリアでは、観光産業が少しずつ回復への道をたどっている。事業者への支援策も手厚く、コロナ禍以前の姿を取り戻そうと国全体で取り組んでいる。

イタリアは日本の明治維新と同じころの1870年に統一され、昨年はその150周年だった。中世以降、北部、中部、南部、シチリアで支配者が異なる時代が続いたので、ローマ帝国時代の広大な統一国家をイメージしてはいけない。北部はミラノやボローニャ、ベネチアなど各都市が中心となり発達してきた。中部はローマ教皇の領地であり、半島のナポリから南とシチリアは、イスラムやノルマン人、スペインやオーストリア帝国の支配が続いた。

それが原因でイタリアは地方によってかなり様相が異なる。食を例に挙げると、調理にオリーブオイルを使うのは中部から南の方で、北部はバターである。ワインも地方によって使っているブドウの種類が違うので味も風味もばらばら。パスタの種類は細い、太い、穴あき、くねくね、ねじ巻き、耳たぶ型とどれだけあるかわからない。

各地で異なる食の伝統をかたくなに守るのがイタリア人の特徴だ。イタリア料理というのはイタリアにはあまりないらしく、ローマ料理、トスカーナ料理、サルディーニャ料理など、ほとんどのレストランはその地方の料理で分かれている。そして自宅の食事は母親の出身地か住んでいる地元の料理スタイルが基本である。ローマやミラノなど大都市では各地方のレストランが多くあるのだが、田舎に行けばその地方独特の料理スタイルで、その地方で採れた食材やワインが提供されるレストランに行くことになる。日本の家庭のように、ハンバーグ、とんかつ、ラーメン、餃子、スパゲティ、カレーなど、世界各地の料理をアレンジして食べている民族は実は珍しいのかもしれない。普段食べている料理の多様性では、間違いなく日本人は世界のトップレベルであろう。

地域の食の伝統を頑固に守るイタリア人だが、旅行となると話が違う。旅行先では普段は食べない珍しいものを食べ、うまい酒をいただくのが旅の醍醐味なのはどの国民でも変わらない。しかし、なぜか日本への旅行において朝食だけは苦情が多い。不思議と朝食だけはイタリアスタイルでないと駄目なのだ。それは至って簡素なもので、甘いデニッシュかクロワッサンに、エスプレッソコーヒーかカプチーノというもの。イタリア人のお客さまがお越しになり、朝食でおいしいエスプレッソを提供したら、このホテル、旅館は素晴らしいとSNSで発信してくれるに違いない。

イタリアの食文化は奥深く、それを守るためにスローフード運動が始まったと考えられるが、残念なことにコロナ禍で廃業が続く市内のレストランやバールをよそに、このローマでもマクドナルドの新規店舗開業がすさまじい。そして高校生ぐらいの若者が多く集まってハンバーガーとフライドポテトを食している。イタリアの外食産業も徐々に変わりつつある。

以前の生活への願望強く

さて、新型コロナウイルスの感染拡大でロックダウンが続いたローマの市内も欧州や米国からの観光客が少し戻り、トレビの泉やスペイン広場はにぎわっている。そこで最近、気づいたことがある。ロックダウン中でも街の中心部で道路工事が行われていたのだが、工事が終わってみて驚いた。歩道がかなり広くなっていたのだ。ローマもオーバーツーリズムに苦労していて狭い道路に観光客があふれていたのだが、観光客がいない時期を狙って改修工事をしたようだ。もともと計画されていたのかもしれないが、観光の受け入れ再開を目指して計画的に準備していることに感心した。

8月には欧米からの観光客が戻り、トレビの泉もコロナ禍以前のようなにぎわいを見せた

ロックダウン中の観光客がいない時期を狙って、スペイン広場に続く歩道の拡張工事が行われた

そのコロナであるが、もともと西洋の自然に対する哲学は「自然の克服」であって「自然との共生」ではない。それがさまざまな環境破壊や温暖化の原因になってきたことも間違いないが、今回のコロナに対する対応はこの違いが明確に表れた。

欧米では、コロナの脅威に対し、これを撲滅してコロナ禍以前の生活に戻すことを目指し、ワクチン開発を急いだと考えられる。日本に比べて死者数が桁違いに多かったこともあろうが、日本で「コロナとの共生」という議論が続く間に、欧州各国では厳しいロックダウンをして国民全体が我慢しながらワクチン開発を待つ作戦で何とか凌いだというのが現実である。コロナ禍以前の生活に戻りたいという国民の願いと意思の反映であろう。

そして欧州連合（EU）全体で復興債を発行して基金を創設し、ロックダウンによる休業補償の原資をつくった。これには景気対策も繰り込まれている。観光を主産業とするイタリアの旅行業界や文化関係者には休業補償がきちんと行われており、いまのところ旅行業者が倒産したというケースは聞いていない。しかし、旅行業界に見切りをつけての転職も多いと聞くので、再開後のオペレーションには混乱が起きるかもしれない。

ワクチン接種については8月30日現在、人口の63%が接種を完了しており、死亡者数は激減している。それでも政府はワクチン接種の拡大を模索し、8月6日からグリーンパス（ワクチン接種、感染証明、48時間以内のPCR検査）がないとレストランの屋内や美術館、博物館への入場が禁止となった。9月1日からは長距離鉄道や航空機にも導入された。これに反対するデモも起きているが、国会での議論を経ての導入であり、政府の姿勢は一貫している。日本から見るとイタリアはのんびりしていていい加減な国に思えるかもしれないが、危機対応に当たっては相当しっかりした国だと考えざるを得ない。

往来再開後は普段どおりに

最後に、日本の宿泊関連事業者から問い合わせの多い、コロナ禍後にインバウンドのお客さまにどう対応するかについてであるが、結論から言えば、日本を訪れるイタリア人はワクチンをすでに打っているので特別な対応は不要になるのではないかと思う。イタリア人のワクチンに対する信頼感は高い。今回、日本のマスク文化が世界に浸透したため、屋内や人混みでマスクをすることに違和感はないし、往来再開時には日本でもワクチン接種がかなり広がっているだろう。通常の公衆衛生とゴミが落ちていないきれいな街並み、清潔な施設を提供すれば問題はない。

もともと日本は清潔で安心して行ける国として信頼されている。そして往来が再開されれば、また多くのイタリア人が日本を訪れるに違いない。イタリアの旅行者はそれを待ち望んでいる。

イタリアにおいてアフターコロナはない。ビフォーコロナに戻るのだ。

（次回は10月18日号に掲載します）